良醉先師
教賛語

明和六年
白雄坊昨為述

中村俊定文庫
文庫 18
451

原本自雄の自筆稿本、
數葉遺存したり

荻野清氏藏本

原本の大切 紫線

自雄之印

贊語

自雄

宮城県図書館

○秀句集方

△其場　秀治海陸山川居宅内外の句作なり

古沼や蛙飛こむ水の音

うき草に水ぐるまの岸に咲

古寺や紅葉ちるあふ石牛

麦井

△其人　ちゑ尼の句作なり人倫の

猫柳長の小袖ときあてゝ

うき草に水ぐるまの袈裟に咲く

麦林

宮城県図書館
村岡文庫

遊人の慰うけて暫く臣遊ず

△ 時節　その高砂とかの山々を

[illegible]

△ 時分　皆夜旦[illegible]の位なり

[illegible]

七夕の移り易きを思ふ

日の[illegible]

△ 天相　日月風雨時の白像

[illegible]

[illegible]

[illegible]

△ 親相　素性の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

麦林

△仲　軍書物語りかりて五代のまとなるも

月清遊行のとき、松の上
に腰掛を用ゐより外は須磨の
浦

△魚　五色無垢にして魚白の魚も

白風の吹き来る谷に買はれの
小鷺の風を吹く乱れる田の水

歌　那よりきまきまよりて見しかと
紅ふりしく五川の関

詩　江碧鳥逾白

△時宜　其世其世其時其時
すすしき句作るべき詩
あくるあよ

○又寄方
枝の高のとりの
相の木のちいさけれども尾長
はつくとの隠者也

○又ひとはの

[illegible]

麦林

○又

[illegible]

麦林

○又 季を前（[illegible]）

[illegible]

麦林

○又 季をうつして[illegible]

[illegible]

麦林

○又

[illegible]

○又 [illegible]

[illegible]

○又 四季を対して[illegible]

[illegible]

春[illegible]

（一ノ六（京本））

○又

麦林

（前表）四季の色もの年高にトアリ

大佛も眠るの春の朧月
那古の秋色も空に似す

○竪の句法

玉ゝも何を問はれて中ゆくり
見こゝろ物も佛いかゝ見たゝり
大柱の天のもあり夏の月

麦林

なつかしい如中絶を立ひつゝし
いまは如絶を立て軒の中を
踏すと云ハ主人なり也

七 地も隅も月の雲 秋の雲

△寂の字 中ゆくて主人公也

秋も来る秋の雲 夏の影 月きゝ
遠ゝ月見しとゝ中ゆく

△寂ノ字 旅ゆくて 餘情也

連の句作ゝ 己せる雲の月

△清字 中ゆくて主人公也

遠の遠の星れ海と柳の月
雲中ゝゝ立ゝゝ

蕉雪録

△濁ノ字　詞ノ終ニ用ヰル也

所ノ字ハ濁ラズ不二ノ字ニ用ヰル

△高ノ字　中ノ字ニ用ヰル也

山々ノ高根々々ニつゝき重なりの高ノ字

△高ノ字　詞ノ終ニ用ヰル也

○数々ノ用ノ例ノ

地名ハ濁ラズ佐渡（国名）

つくしと雲の隠者や

あふぬの持ちらす

右十二文字ハ常ニ濁ラズ

常用の五文字五十音ハ六一通ル

五用の五用ノ者ヲ拾ヒ

ふるゝ　ふれ　ふれば　ふれば　ふれ

大原山の雪のまれ

地歌下の七文字を濁ラズ

すとんすと　ふるゝ　ふれば　ふれば　ふれ

○数ノ濁ルハ　わかみを付ルトキ濁ル

川ヲ渡リて過ルや　渡ル時

流ル　其　たけれる　ふるゝて

遠くと中七文字ハ　わかみ也

まれに書をとゝくに見えて（はもず）
○名所をもよのうた
宝干や　ゐるにのまし　宴宗し
水無瀬　歌の　命あり　ゆけ
此たなびく　用る
此水無瀬　用る
名所をもよのうた　ゆはなし　ゆ
古るゝ　つゆ　ゆ　こゝろ也
まあるくかりゆ

○てる月を以て万歳を祝する
つるの用也　高砂　船ひく　ゆ
此やのうらをつけて見るべし
○数る程尾のうら
宝ゐる　隅を林　せゝみ　桂宝
宝ゐる　船　神　一見
白れる　人　見　歌　御り
生をの　超回　性　つく史
祝尾　て　多　るゝ

○たゞことゝいふるす
精
精也世はゆるなすて れ事
元々あはれ気もなき文問ふ
俳句多くとも 貴方の柳
出れば足年 なる祈きゆる
蔵すれ自ものるとたゞ
ちと作ることを世よく考し

○情とらふる
世の中も待て生る文涙
是世界といふる姿を
ものいふやと五文字をかえて

蓮之
珪琳舟
温故泉古選

又ぶし
ハタくるを生れて姫し花の陰
是情とらふ
俗情から身を
なる色
又名も知くとても花の陰と
作ぶ時も為あり姫す金情
ず

○脱俗字の事

八ん間空を面白御子柳
春の日の花の島姫る

又

枯れハとわかよたな梅桜の花
庭を掃きて悲しりおくさみ

又
瓮のしらへも深し出の君
めでたく心を待れて庭結し

○附会のこと
附会ト執跡ありたとへばまあと妾と
妓婦の如し又一日の白庭辰と年季
奉公人と普代もの、如し其間情合別也
被人云中のよい夫婦のうへ云向たるが

（提要任侍発る
二句の間ヨ主人也と有り歌すこと全体也
是はいかい歌一首ようする也）

[illegible]

○兄貴云付合はかりそめとそ云ふたゞ見
宗祇法師の説にも、上手の付合は他人の中よきが如し、下手の付合ハ
親子兄弟の中あしきがごとしと

○兄貴ね云
宗祇法師の説ニ付合は付合の手材る也しかし、
新しみの中に有べし、彼今の道の堂

如し又其道を知て余のつゝくがごとし逍遥
むかしハ放逆流随の四道といひ九品と
いひ疎句親句といふ名目あれども其間は
の用なし

句平生ニ出ル
平生底（ニアリ）
但シ句のみ

（矢橋より瀬田が虚といふ有
趣向久方の追ひ（平生なる）
八掛るにあつば（平生なる）これは情てみる此古
此趣向旅と見れば静しみて
骨折ず趣向の新古も
曲節地も是を知べし
曲節を大事とも附べし

泣子と地頭ハヤ勝ル者

信玄の牛を俵と寝子也　蓋　好子

馴ぬ娘子は隠す内證（貧）　此所へ

早く見よ今二十八日　強化　岩俵

ひろききは弥生軍の大手也（戦場）　蓋　摂賢

今はやる中段羽織を着用つゝ　岩倉

奉行の鎧を誰か就ける（城下）　蓋（陽成集　泥足）

道とおして外の泥足

くたびれしふの書物の見えこない（市宛りなとと見て）

起て思ひ米惜る介納（印金居つけ）

唐織を縫及結ふうちは立出され

京の果の浜々た狂歌をよみ成り（做る）

二人つゝても足らぬ傘

難面さはあまる遠近みく来て（高く溜ひ）

宇仰向の五ツされる結年

助用の葛の子供の麼もかし

金蔵輪子写も出来（社系）

低んで降る雨の物のあり
物住
り燈る離別れ女房の針の跡
涙
涙を拭ぬる吸付けて居る
世房
立聞するもれハ恰も蕭条
乾結と猫の紐まる
夜更
雨ふるなり降る
降る時は雨
雨嵐
雪降い傾城はかり強めず

（存在語、為朗の
麻父の付句）

奇麗な玉し
乗を
乗を投げ遣人いれを
金閣の若ゝあたゝまるはゆめて
焼れ
捨て斯うと仰信子を抱
水のえみ
大名のあり重衡と見て
燈道を弱る
傾城の夢
傾城のあり
用心をもとて
且那のうしろ
傾城の
金

買人多義せるのれも四座組
買人僧
その咲も法華経なる
腰張をへけれ低き寄合から
弾とんて
樹も稀なる留守も遣はず
因うへのめ の尼みあくらる
就別女房
はるゝ山もは紛れ面見て
生かす高せて鍋を落かゝ
無地落
西買うて参ほと子の仰事

因果をせるのと宣旨を夢りて
新イコ 幸院おの詞と見て
小刺を刺す 陰の山蟬
長い詩状 まま幸い 退屈
家奉公する
髪切れとうま世は勝の子ゝ
山中 ものの 自由かう
蟬丸
清貧と稀世か新を見あ無
おものかうは 竹を用る 後
法人
預かつん 鐘を 横く入て見る

仏壇の扉の字を書く
賣買
賣て買る債の証のことを
曙かけさせて債権者より
どうぞ
家の貸に一心のなれの果
妻いよ〳〵と住持祝する
鞠位と見て
翁鞠ら刈〳〵他をうきまりを
叶鞋をのぞけは
乳母の里とゝんて
なるものの覚て乳母に襟をか

合点のゆゝしき絵巻子
悪に
孫をもたハ家にかすの名を立る
くわつたりとゝかたれかゝ祝ひを
其人をきゝて
ゑまりとよのうるい多袖
曙か廣をて妙
孝行の離別れ
ちゝをもて
尼寺
主るなる妙王と妙女と所遣

大燈の賜を蒙て 極る
夕部のはもれかと嫁こそ呼て
こそ家
ら帽子を着てちゃらの長り
手志
けもの 仏生何年長ら
山之白 と為てみちゃ
吸水とんと岳人とを
掉 赤かまつて水の明せあ
寄る声 と 赤 赤たるも
玉の 張人 ちゃらる 積る正宗

敬石の重いは公家なる
皆 北條のもの を 昊寶
れはこのみ 吸す 廻廊
軍
うち 死かきはあてからは落つして
それ 夢分 あたつて 仏 石
山師
足尾の 石 師 石を一笹
朝ひ弟いへく 近も 重九ケ
所化
美い住持 よ あはす 一 山

勢助の雲の軍をさやけは
天相
雲つたへしよりはれのゆく
百つれて冊陰を郎はこちらに来
時節
縁て作るわれ細の花

○附合三句間理屈の事
世情
世のものきてるあれ果
一ふりも呼はす通る縁先へ
此附耳を以て情す趣向付

たるに理屈にて一句立す
目を以て所の荒たる淋しを
見る時きしるしたる

○一句理屈のる
仮作る肥れ女姉かりて
肥の字姉かるれ理屈あり
笑ふまれてとあらは風雅
理屈なるべし

作るの連ハ作由てあるべく
是は二句の理屈なり

○所会は工夫する（きる

九論から松（わたくしの）ほーらみ

野狐の法堂（スミ）て居るその外

是年農屋張るなる正所也

逆 **王**てくるあまき影

是わらこの乱所なり

一 変るは詞の主なる（なる

一 弟子のる

一 名所なるる

一 四日目開端逆回のる

一 三月のわるのよりは

結ぐ（ぐる）る殆すて

一 犯法のる

一 虚実のる

一 四折変化のる

一 三月九月のる

一 所なるの逆回は前なる動転（きる

御兵法師の教せる辞之生い玉角の

用を逆回るる教也は意なるる

一 変るの情を度くま（きる

一 **月**花仕立のる

十論

一 題を案ずる作のこと
一 平句と発句とを作のこと
一 発句自然の姿のこと
一 裏附のこと
一 おもしみを雅俗ともに
一 附合一句の姿三句の間つゞく
一 まつ面かゝりさまのこと
一 重ねに作ること
一 眼を作ること

一 集句のこと
一 名所旧跡をもとめ
一 眼前實境のこと
一 こゝろ物語のこと

六日一走を系の御発句人
初学の為に問ハるゝ所
他見を用ゆる発句の事
俗体を乱ハたゝ合歓を書
その外

明和壬午年六月初七　つ人

佐馬字

為何友四郎子

17

四季百題

春三十題

梅の香の色もうすくよそなれし
宮の内の月の前の梅の花
ふるさと遠き一枝を
風中にはるとも知らぬ
雨の内に根無草の花猫の恋
幼くもこの春ひとつかさ
菜の花の蕊に蝶の
何年か市に陽炎沖の
うぼもきかぬ人の
たち消えい寄月

畠堀る嫖鳥や妻の百
麦掃や裾にかけたる旅のかさ
麦ほこりや下駄は足にはれたる綱
ひとさしの色にあまたる蓮下
仰さかのに仰ぎし白ひれし花さかり
山家の簾に遊ふ撫子の
天の隙にちらはふ人の汐干狩
新墨裾茶摘てありもの陰
藪はゑて世並の昼寝も堀の下

夏二十題

蝙蝠をたゝいて見れ鳩ありせは
雨雲にまきれし鳴ほとゝきす

卯の花や朝てはもとる花さし
久ゝ年舟はむかふの岸にあり
岩高くかの数もをけふり
降寒や一本のもとによりけし
柳にゑきふを流るゝわかな
子もめやあらと嫁む身のうたへ
引さけてりし雲ならやめ賓
口河の関とめるゝ鶯の鳴
小糸めも待ちし恋やわりき
湯るも湯かへしをの鐘
唐関に海をまたふ加川さけ
將をよみ御の拍子割へもふ

秋三十題

秋ちかき山の
気配かぶれて出たり天の川
秋の月は恨れ
と云ふ暮り
宇宙の秋をしらるる一あるべ
門の間かぶ独るかなしさ

まるまる間の一本の花火が
遠くの一隅に
投げられた月を見る角力
夕虹を目の果まで見て
虫鳴くや
月の裏をつみ
月の余所の
白い陽の月を蓋して
掃き寄せて
那一本の花
明月や
傍ひとり

彩陀や深林の中に立よりり
陸路や出山姿を垂て居る
納まき紙見て老き拾ひける
鹿の声や渡る夜半川を越て来
紅丹鶴手まり音さき探り足
向く方八方仕舞あるあきまぎ
うつしける八七々のなすらんし
紫錦や二色の古を二はしら
細き音の揖子に座る夜宮の旅
起てみる古に座る旅ゆき
泊もや、棹越別て泊の月
山嶺、ひのあるし名高し菊の花

荒行の後あたあて江まさる
川舟や松にあかしひらく家

冬二十咲

舟を過く空割りして時雨かな
八宗かむ何にかゝる大の霧かな
菓子風に示して晴り御花
時松の木あまり紛ら紛の留まる
誰か像に居行は似たる人や笠
捨て世を人捨に見るる日捨かな
高ら降る時ら浮び鶴鳴
風や連雀の尾を枝へかさく
湯枝の起るやりしゐ那かな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]